

実態調査でみる 携帯電話によるインターネット利用動向

工藤ひろえ●株式会社インプレス ケータイWatch編集長

第3部

携帯電話利用者動向

パケット定額制サービスでメールやウェブの利用促進が期待 2004年度は第三代携帯電話本格普及元年に

パケット定額サービスの衝撃

2003年度の携帯インターネットに関する最大のニュースとしては、auのパケット定額サービス「EZフラット」のサービス開始が挙げられる。これまで携帯電話では、メールやウェブ閲覧など、すべての通信料が従量制だったため、利用者はパケット料金のことを常に念頭において利用する必要があった。

定額サービスを利用することで、従量課金による“青天井”な利用料の心配がなくなり、携帯インターネットサービスの利用が促進されることが予想される。2003年11月末より「EZフラット」サービスを開始したauに対抗する形で、NTTドコモも2004年3月にFOMAのパケット定額サービス「パケ・ホーダイ」を2004年6月より開始すると発表。2004年は、長く続いた従量課金時代から、パケット定額サービスが選択できる時代に本格移行する。ボーダフォンとツーカーは本稿執筆時点で定額サービスプランを発表していないが、ボーダフォンは5月の2003年度決算発表の席でパケット定額サービス提供について言及、積極的な姿勢を見せた。音声通話による収入は頭打ちの傾向が強まっている携帯電話通信事業において、パケット定額サービスを用意できなければ、月間利用料の高いユーザーが他社サービスに逃げ出す可能性は高い。

進化を続ける携帯電話端末

端末の機能としては、メール機能、ウェブブラウザー機能、液晶のカラー化・大型化、和音着メロ、デジカメ搭載と短期間に携帯電話は大きな進化を遂げてきた。2003年度も進化のスピードが緩むことはなく、各社が競って新機能搭載の携帯電話を発売した。

携帯電話の仕様で2002年度から大きく変わった点としては、200万画素のメガピクセルデジタルカメラ搭載、QVGA(320×240ドット)表示の液晶ディスプレイ搭載、miniSDなどのメモリーカード対応が挙げられる。メガピクセルデジカメ搭載により、撮影した画像を保存するために従来よりもはるかに大容量の記憶領域が必要となることなどから、2003年4月にNTTドコモが発表した505iシリーズ以後に発売された機種では、miniSDなどのメモリーカードに対応した製品が主流となっている。

2004年度にはソニーの非接触ICカード技術「FeliCa」に

対応したICチップ搭載携帯電話の発売が予定されている。非接触ICカードの搭載により、電車の改札や劇場の入り口などに設置されたインターフェイス部分にかざすだけで決済やチケットのチェックインなどが可能になるサービスが想定されている。ソニーとNTTドコモはサービス提供に向け、ソニー60%、NTTドコモ40%の出資比率で2003年10月に新会社フェリカネットワークスの設立を発表。2003年末に実験サービスを開始、2004年夏予定のNTTドコモのFOMAとPDC端末を皮切りに、携帯電話会社各社から対応端末が発売される見込みだ。

2004年は第三代携帯電話でFOMAが巻き返し

また、2003年度は第三代携帯電話本格普及の足がかりを固めた年といえるだろう。cdmaOneから第三代携帯電話へソフトランディングしたauは、ユーザー側が特に意識する必要もなく順調に移行が進んだ。しかし、従来のPDCからW-CDMAへと、まったく違う技術へ移行し、インフラも技術ノウハウもすべていちから構築しなければならなかったNTTドコモとボーダフォンは移行がなかなか進まず、NTTドコモは2002年度末にFOMAの契約数を当初目標の100万から32万へと大幅下方修正した。

第三代携帯電話には音質のよさや通信速度の速さなどの優れた点があるものの、本調査でも明らかのように、利用者が機種変更する主な動機は「新端末の機能」だ。

2002年度までは、FOMA対応の携帯電話端末はサイズが大きく、機能や仕様もPDCの上位モデルである500番台の端末に見劣りするものが多かったことから、FOMAの普及が進まなかったが、2003年12月に発表した900iシリーズではPDC型番500番台のシリーズに見劣りしない最新の機能を搭載した。900iシリーズの発売でFOMAの契約数は300万を超え、2004年度はFOMA本格普及の年になると見られる。

「安くて速い」無線接続サービスTD-CDMA

2003年度はTD-CDMA方式の準備が本格化した年でもある。TD-CDMA方式の無線接続サービスは早ければ2005年度にもサービスインすると見られている。TD-CDMAはFOMAなどで採用されているFD-CDMA方式と同様にCDMA技術をベースとしているが、周波数帯域の割り当て

方に違いがある。

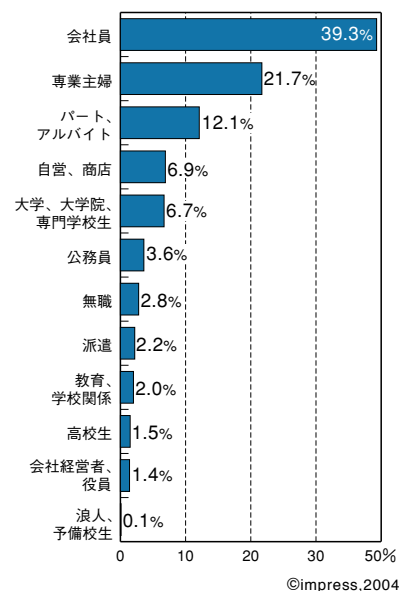
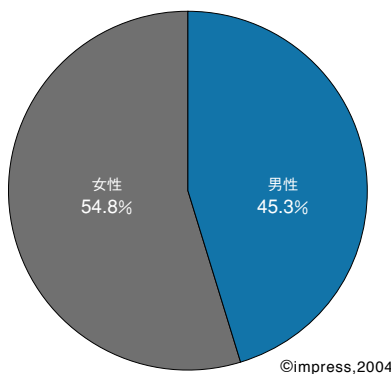
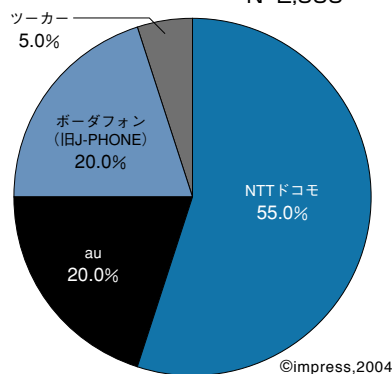
FD-CDMAは音声通話サービスに重点を置いて設計されているため、上りと下りを分けて周波数帯域を分割する方式で、音声通話の品質を確保するために同時接続数には制限がある。一方、TD-CDMAでは周波数帯域を時分割するため、同時接続数などの制限は理論上受けず、また固定回線のADSLサービスのように上りと下りの速度が非対称な接続サービスを提供できることから、データ通信向きの方式である

とされている。実際のサービスでは他のユーザーと周波数帯域を分けあう形になるため“みんなで使えば遅くなる”が、理論値では最大下り3.1Mbpsの速度が出ることから、次世代無線通信サービスとして期待を集めている。TD-CDMA方式ではIPモバイル、ソフトバンクBB、イー・アクセス（TD-SCDMA）の3社がすでに実験局の予備免許または本免許を取得、各社とも実験段階に入っている。

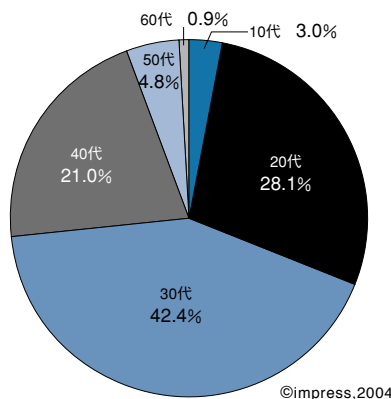
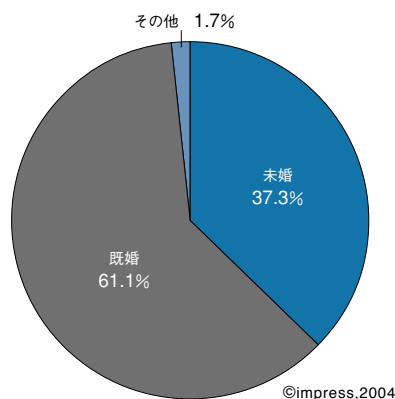
3-1～3-3 携帯電話のインターネット利用調査対象と調査概要

調査対象	パソコンでインターネットを利用している16歳以上の男女個人
対象地域	全国
調査手法	インタラクティブウェブ調査
サンプリング	株式会社インタースコープの保有するスコープNet会員（調査モニター）から、プライベートで携帯電話での通話およびインターネットを利用したメールまたは情報サービス閲覧を行っている人を抽出。
アンケートサイト	株式会社インタースコープ
最終有効回答数	2,000サンプル
※内訳:NTTドコモ1,100サンプル、au400サンプル、ボーダフォン（旧J-PHONE）400サンプル、ツーカー100サンプル（社団法人電気通信事業者協会発表事業者別契約者数割合に準じる）	
調査期間	2004年4月23日～4月26日（上記回答数目標を達したため終了）

回答者のプロフィール 通信サービス会社 N=2,000 回答者のプロフィール 性別 N=2,000 回答者のプロフィール 職種 N=2,000



回答者のプロフィール 未既婚 N=2,000 回答者のプロフィール 年代 N=2,000





[インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、データ、URL、名称など)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真・図の作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレスR&D)などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D(初期は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ iwp-info@impress.co.jp